



CONTENTS

◆研究科長より

- ・新年のご挨拶 1

◆学術・教育

- ・大学院教室紹介「神経内科学分野」 2
- ・MD-PhD コースについて 4
- ・第9回連携研究センター研究成果発表会を開催 5
- ・サステナビリティウィーク2014実施報告 5
- ・北海道大学プレスリリースより
 - ・一発達期の2つのNMDA型グルタミン酸受容体サブユニットはシナプス回路の発達と成熟を相反的に制御する 6
 - ・動体追跡照射技術を適用した陽子線治療システムが薬事法に基づく医療機器の製造販売承認を取得 7

- ・受賞関係 7
- ・第18回医局対抗サッカー大会 8

◆お知らせ

- ・退職記念式典のお知らせ 10
- ・新任教授特別セミナーについて 10
- ・消防訓練の実施 10
- ・平成27年度 医学研究科（博士後期・修士後期）学生募集出願状況 11
- ・平成27年度 科学研究費補助金応募状況 11
- ・平成26年度 財団等の研究助成採択状況 11
- ・平成26年度末 教務関係行事予定表 13
- 広報室便り32・編集後記 14

1 研究科長より

新年のご挨拶

笠原正典（かさはら まさのり）医学研究科長・医学部長



明けましておめでとうございます。皆様には、健やかに新しい年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

昨年は、北海道大学が「世界ランキングトップ100を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学」として文部科学省よりスーパーグローバル大学等事業に採択されました。大変うれしい出来事でした。北海道大学では、国立

大学改革プランに沿って、グローバル化やイノベーション創出などの機能強化、人事・給与システム改革、ガバナンス改革が進められていますが、医学研究科・医学部も主要部局の一つとして、北海道大学の発展のために貢献していきたいと考えています。

医学研究科は平成29年度に医学研究院・医学院に改組され、新たに医学系の学院として医理工学院が設置される予定です。この改組に際しては、医学院の修士課程にM.P.H.（Master of Public Health）の学位を授与する公衆衛生学コースを設置する計画です。今年の2月には第1回設置構想委員会が開催され、学院・研究院への改組に向けての本格的な活動が始まります。改組を機に、大学院の充実を図っていききたいと考えております。

大学院教育では、初期臨床研修制度の導入以来、入学者の減少が大きな問題となっておりました。しかし、ここ1～2年は入学者が回復傾向にあり、ようやく明るい兆しが見えてきました。今後は、世界レベルの教育研究を行うトップ大学としてふさわしい教育体制を整える必要があると考えています。この鍵になるのは、国際化です。外国人研究者の招聘、英語による授業の充実、質の高い留学生の入学を推進する必要があります。

学部教育では、平成25年度のカリキュラム改訂で大幅に強化された診療参加型実習プログラムの開始に備えて、本年1月から臨床系教育助教が増員され、9名になりました。医学教育推進センターが中心となって、学生を受け入れていただく学外の病院との折衝がすでに始まっております。

施設面では、長らく待ち望んでいた附属動物実験施設の改修工事が昨年の5月末に完了し、最新鋭の施設として再出発しました。また、昨年9月から旧寄宿舍の改修工事が始まり、今年の夏からは旧看護師宿舎の改修が始まる予定です。これらの建物は、医学部（医学科、保健学科）、歯学部、薬学部が合同で利用する医系多職種連

携教育の場として生まれ変わる予定です。ここには、各学部の学生のためのスペースの他、クリニカルシミュレーションセンター、医療イノベーションセンターが設置される計画です。また旧看護師宿舎の1階にはフード&メディカルイノベーション国際拠点のサテライト研究スペースが用意され、病院の近くでトランスレーショナルリサーチを行う環境が整います。

御存じのように、4年後の2019年に北海道大学医学部は創立百周年を迎えます。浅香正博医学部同窓会会長に後援会会長をお引き受けいただき、現在、百周年記念事業の事業内容について検討しているところです。本年の早い時期に実行委員会を立ち上げる予定です。皆様にはご理解とご支援のほど、お願い申し上げます。

北海道大学大学院医学研究科・医学部が国内はもとより世界に冠たる医学研究・教育機関として、さらなる発展を遂げるには研究力と人材養成機能の強化が不可欠です。微力ではありますが、誠心誠意努力してまいりますので、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。新年が会員の皆様にとりまして幸多い年となりますことをお祈り申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。

2 学術・教育

大学院教室紹介「神経内科学分野」

佐々木 秀 直（ささき ひでなお）神経内科学 教授

廣 谷 真（ひろたに まこと）神経内科学 助教・医局長



神経内科学分野は1973年に北大脳神経外科学講座診療部門としての診療開始を端緒とし、1987年に初代田代邦雄教授のもと診療科として独立しました。当時は日本における神経学の黎明期で、本教室はとくに北海道に神経内科診療を根付かせるべく先駆的に活動してきました。1995年に医学部講座として開講し、2003年に2代目佐々木秀直教授が就任してからは、診療に加え研究・教育にもより一層の力を注いでいます。

これまで、本教室では以下の5点を目標に掲げています。最近の活動内容と共に簡単にご紹介します。

1. 北海道発の独創的な医学研究

北海道という地域独自性を活かし道内関連病院と連携

を図ることで研究のオリジナリティや精度を高め、北海道から世界へ向けて発信できる研究を推し進めています。

- ① HoRC-MSA：多系統萎縮症のレジストリシステム Hokkaido Rare disease Consortium for MSA (HoRC-MSA) を設立し、北海道における同疾患の疫学調査を行い、将来的な治験を見据えた各種スケールの策定やバイオマーカーの特定を行っています。
- ② 神経疾患のバイオマーカー：神経変性疾患、免疫性神経疾患（アルツハイマー病などの認知症疾患、パーキンソン病、脊髄小脳変性症、多発性硬化症など）の診断と重症度評価に有用なバイオマーカーの特定を、生体サンプルを利用して行っています。とくに、プロテオミクスを用いた候補タンパクの同定やマイクロRNAの定量などを中心に行っています。
- ③ 免疫性神経疾患：本邦でも北海道で有病率が高い多発性硬化症を中心にリンパ球機能解析、遺

伝子解析、自然免疫機構についての基礎的研究を行っています。

- ④ 筋疾患：教室創生時より積極的に行っている筋組織病理について、多くの病理標本に遺伝子解析を加えながらより深い研究をすすめています。
- ⑤ 高次脳機能障害：専属の臨床心理士を配属し、幅広いバッテリーでの評価を行っています。それらの結果を脳機能画像などと融合させることで、神経疾患における高次脳機能障害について多くの知見を得ています。
- ⑥ 遺伝子解析：教室では遺伝子解析を行うに十分な環境が揃っており、種々の神経疾患について sequence 解析、array CGH 解析、定量PCR 解析などを行っています。

2. 新規治療法への積極的な取り組み

パーキンソン病や難治性振戦に対する脳深部刺激療法、痙縮に対するバクロフェン髄注療法を脳神経外科と共同で行っています。特に、脳深部刺激療法については高次脳機能評価を詳細に行うことで、適応評価や長期フォローアップに役立てています。多発性硬化症に対するnatalizumab治療や筋萎縮性側索硬化症に対するメコバロミン治療など近年著増している神経疾患への各種臨床治験に加え、POEMS症候群など医師主導型治験にも積極的に取り組んでいます。

3. 多彩な疾患に対応できる神経内科専門医

神経内科の担当する領域は脳・脊髄の中樞神経から末梢神経、筋まで幅広く、また急性期疾患から慢性期疾患と実に多彩であることから、専門医前教育として診察手技や論理的な考え方といったbasicな土台をしっかりとつくることに重点を置いています。診療で欠かすことのできない電気生理学検査や神経放射線については定期的

なカンファレンスや実技指導を行い、これらの経験症例数は全国的にトップクラスに位置します。また、神経内科専門医は内科学会認定医（新・内科専門医）取得後の二段階方式となっており、内科的な研修・素養も必要であることから、卒後研修期間には双方の研修履修となるよう、充実した研修カリキュラムを用意しています。

4. Academic interestを持った神経内科専門医

神経疾患は同一疾患であってもheterogeneityが大きく、十分に解明されていないところが多い分野です。既成の疾患概念に相応しないような症例を経験することも珍しくなく、日常の診療から新しい知見を見出すことのできる選眼力をもった神経内科専門医を育成するよう教育しています。現在も多くの臨床研究を同時にすすめています。とくに専門医取得前の若手教員には論文での症例報告を推奨しています。

5. 地域連携による診療協力と卒後研修体制の構築

本教室は筋病理を研究の柱の一つとし、多くの実績を残してきましたが、現在は定期的に全道の関連病院をwebで結んだ筋病理カンファレンスを行っています。本教室と道内関連病院で毎週のように行われる筋生検からの筋病理像を実際に供覧し、診断・診療レベルの向上を図ることが狙いで、地域医療を通じ北海道の神経筋疾患を支える大きな柱となっています。

超高齢化社会の時代へ突入し、神経内科に課せられた使命も大きくなるばかりです。これまで教員一同精力的に診療・教育・研究に取り組んできた結果、2018年には日本神経学会学術大会を開催することが決定しました。さらにその先の将来も見据え、とくに若手教員が意欲的にかつ一層の活躍ができるよう、日々研鑽を積んでいきたいと考えています。



神経内科集合写真

MD-PhD コースについて

鈴木 智 貴 (すずき ともし) 神経生理学分野 医学部医学科6年

こんにちは。医学科6年生の鈴木智貴といます。僕はMD-PhD コースというものを選択しました。以下、このコースについて、医学科の後輩に説明する体で書かせていただきます。

○MD-PhD コースとは

北大MD-PhD コースは、学生に早期から研究の機会をあたえること、優秀な若手研究者（基礎医学分野）を養成することを目的として導入されました。このコースを選択した学生は6年次から研究室に所属し、研究に携わります。同期の他の学生と同じように国家試験を受験し医学部を卒業しますが、同期のほとんどがその後臨床研修へとすすむのに対し、MD-PhD コースの学生はそのまま北大の大学院に進学し、所属する研究室で研究をすすめます。

○お金の問題

僕は神経生理学分野に所属しています。「世界の根本」、「自分の根本」である脳を研究して、自分が考えたり、思ったりすることの基盤となる現象を解明していくことを目指しています。とはいえ、当初からMD-PhD コースを選択する気でいたわけではありません。脳を研究することには非常な魅力を感じていたものの、金銭的な問題を考えたとき、初期臨床研修を終えてから大学院に進学するのが現実的ではないかと考えていたからです。しかし、MD-PhD コースを選択すれば手厚い奨学金を優先的に支給してもらえることを知り、考えが変わりました。実際、同じ教室のMD-PhD コースの先輩方はきちんとした生活を送っていました。大丈夫、ちゃんと生活できるみたいです。

○研究について

僕自身、まだ医学科6年生であり「研究とはなにか」だとか「科学の本質」だとかということについてまともに話することは到底できません。しかし、文字数の関係から（すいません）あえて「研究について」思っていることを書かせていただくと、研究の大きな特徴として「世界初」ということがあると思います。教科書を含む

様々な文献から知識を吸収していくのは基本であり、非常に大切なことです。しかし、きっとそれ自体はあまり面白くはないでしょう。まだ世界の誰も知らない本当に大切なことを、自分自身の手で明らかにしていくことこそ、最高に面白いのではないのでしょうか。僕はその作業を「研究」と思っています。教科書を書き足し書きかえていくような成果を出すうちに、ひょっとするとこれまでの「世界」をひっくり返すような発見があるかもしれません。実際に研究を始めてみるとうまくいかないことばかりですが、それでも僕はそんなことを夢んでいます。

○説明会ほか

MD-PhD コースについて少しでも興味を持った人は、先生方や教務の方に相談してみてください。MD-PhD コースの制度等については、医学研究科のホームページに詳しく書いてあります。MD-PhD コースの説明会というものもあります。説明会で僕は解剖発生学の渡辺先生に上述の奨学金の話も含め、がっつり話を伺うことができました。当たり前ですがお金はかからないので、興味のある人もない人も説明会にはぜひ参加してみてください。僕の時は僕も含めて2人しかいませんでした。

○最後に

僕たちは自由です。自分自身で、限らない選択肢の中から自分の道を選んでいくことができます。MD-PhD コースは、そういった選択をするうえで強力な助っ人になり得ると思います。検討してみてもいいかながでしょうか。



実験をはじめようとするところ

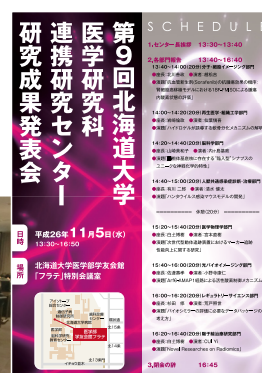
第9回連携研究センター研究成果発表会を開催

第9回医学研究科連携研究センター研究成果発表会が11月5日、医学部学生会館「フラテ」特別会議室において開催されました。

本センターは、長期的展望に基づいて堅実な知を追求する基盤的研究と、目標と期間を設定して先端的・革新的な研究開発を目指す戦略的研究の融合を図ることを目的として、平成18年4月1日に設置された学際的研究拠点です。これまで、大型研究プロジェクトを中心として多彩な研究活動が展開され、医学・生命科学と理工学の融合領域において、世界をリードする数多くの研究成果が得られています。

今回の研究成果発表会には52名の教職員・学生が参加し、センターの各部門からの報告において最新の情報

が提供されました。参加者にとって、有意義な情報が得られ、今後の取り組みに向けて新たな可能性が示唆された研究成果発表会となりました。



北海道大学 サステナビリティウィーク2014関連行事 「環境と健康と科学コミュニケーション」実施報告

池 野 多美子 (いけの たみこ) 環境健康科学研究教育センター 特任講師

環境健康科学研究教育センターは、医学研究科、保健科学研究院などと共催で、SW2014関連行事として、11月17日(月)、学術交流会館小講堂にて国際シンポジウム「環境と健康と科学コミュニケーション」を実施した。シンポジウムは学内の研究者3名に加えて、韓国の仁荷大学校および北星学園大学から、科学コミュニケーションに関する専門家を招聘し企画された。目的は、地域社会の環境変化が人々、特に子どもなど感受性の高い人びとの健康に与える影響を題材にし、教育や科学コミュニケーションの役割について、日本と海外の具体的な事例を挙げながら討論し、今後の課題を明らかにすることであった。

最初に北海道大学高等教育推進機構・三上直之准教授が、リスク社会に生きる我々に今なぜコミュニケーションが必要か、コミュニケーションの目的の多様性、またコミュニケーションへのステークホルダー[利害関係者]の参加が欠かせない点に関して講演した。次いで仁荷大学校のJonghan Leem教授が、韓国における子どもの健康に関する問題とリスクコミュニケーションについて講演した。同じく子どもの研究に関して、環境健康科学研究教育センター・伊藤佐知子特任助教が、環境化学物質曝露による影響に関する「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ」の紹介と、研究結果に関して地域社会とのコミュニケーションのあり方を講演した。医学研究科Sharon J. J. Hanley特任助教から、子宮頸癌ワクチン接種導入に当たり、イギリス政府が行った啓発・教育・リスクコミュニケーションの事例に関して詳しい紹介がなされた。続いて北星学園大学・大島 寿美子教授より、科学研究者による情報発信を、受け手である市民やメディアが理解し、共有する重要性や手法について講演があった。

続く、パネルディスカッションでは、フロアからの質

問や意見を交え、討論が行われた。研究成果発信においては、Leem教授による発表にみられた①科学的証拠(エビデンス)の確立、②正直・率直に結果や情報を開示すること、③政策決定過程への国民参加の必要、④国民の不安の共有といった4つの科学コミュニケーション戦略に見習う点が多かった。最後に、北海道スタディ研究の代表者でもある岸副センター長から、参加者コミュニケーションの重要性を科学者の中でも世代継承していく必要性、情報や成果を発信し世界に貢献していく中で、国際協力の重要性に関する発言があり閉会となった。

学内外総勢70名の参加があり、参加者のアンケートからは、「新たな視点を得た」「海外の事情を知ることができて有意義だった」「研究者が市民とのコミュニケーションに取り組んでいることを知ることができた」といったコメントが得られた。今後も引き続き科学コミュニケーションに関する討論の場を提供する意義を再認識するシンポジウムとなった。

司会はセンター(兼務)の保健科学研究院・山内太郎教授・地球環境科学研究院・田中俊逸教授であった。



パネルディスカッションにて、センター長から発言

各研究のホームページ掲載内容はこれから <http://www.hokudai.ac.jp/?lid=3>

一発達期の2つのNMDA型グルタミン酸受容体サブユニットはシナプス回路の発達と成熟を相反的に制御する一

渡 辺 雅 彦 解剖発生学分野 教授

臨界期とよばれる生後早期の発達過程においてシナプスの刈込みが活発に起こり、生活史を反映し環境に適応できる機能的な神経回路へと改築されます。NMDA型グルタミン酸受容体は、シナプス回路改築を制御する中心的な分子です。今回、発達期の脳に発現する2つのNMDA受容体サブユニットGluN2BとGluN2Dの機能的役割の違いを探索しました。ここで用いたのが、ネズミの顔面に生えている触覚毛と、それを伝える体性感覚系です。触覚毛で捉えた感覚情報は脳幹と視床で中継され、大脳皮質の体性感覚野に届けられます。体性感覚野や中継核には、触覚毛の配列と相同のシナプスクラスターが作られ、その形状からバレル（樽）と呼ばれています（図1）。バレルは生後に形成され、臨界期における除毛や感覚神経損傷などの実験操作により容易に変化しますが、臨界期を過ぎると永続的な構築へと成熟します。

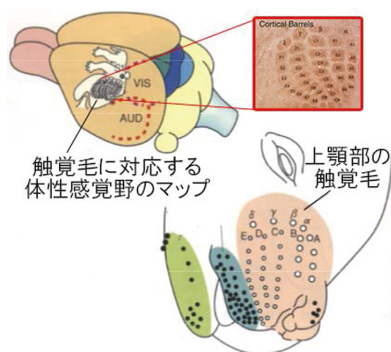


図1

私達は、GluN2B遺伝子を1つ欠損するGluN2B^{+/-}マウスでは野生型マウスに比べ、バレルの出現時期と、臨界期の終了時期が遅れていました。反対に、GluN2D遺伝子の両方を欠損するGluN2D^{-/-}マウスでは、野生型マウスに比べ出現時期も臨界期終了時期も早まっています（図2）。次に、この相反作用の理由を探る目的で、GluN2BとGluN2Dを発現するニューロンとシナプスを検討しました。すると、GluN2Bは体性感覚系の上行路を構成する興奮性投射路に沿って分布し、GluN2Dはこの投射路に対して抑制を行う局所回路に選択的に分布していることが明らかになりました（図3）。

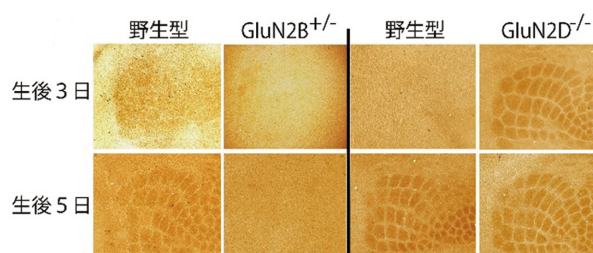


図2

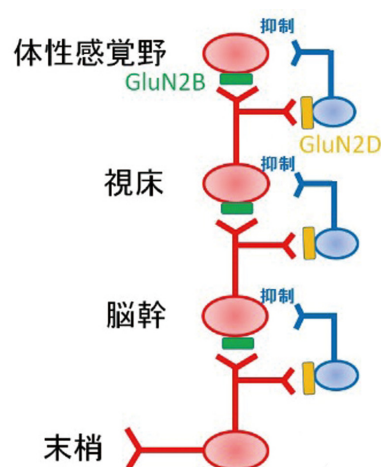


図3

以上の観察結果から、上行性投射路に発現するGluN2Bは体性感覚系の発達と成熟アクセラレーターとして直接的に促進し、局所回路に発現するGluN2Dはこの上行性投射路の改築に対して間接的にブレーキをかけていることがわかりました。この相反作用を通して、臨界期におけるシナプス回路の発達と成熟が、早すぎず遅すぎないように調整されていることが考えられます。

本研究成果は、The Journal of Neuroscience（米国神経科学誌）に掲載されました。

（研究発表プレスリリース掲載日 2014.10.16）

動体追跡照射技術を適用した陽子線治療システムが薬事法に基づく医療機器の製造販売承認を取得

清水 伸一 放射線治療医学分野 准教授

「最先端研究開発支援プログラム」の採択を受け開発した動体追跡照射技術を適用した陽子線治療システムが完成し、10月23日に薬事法に基づく医療機器製造販売の承認を取得した。北海道大学病院にて世界で初めての動体追跡照射技術とスポットスキャンニング照射技術の両方の技術を用いた陽子線治療が可能となる。

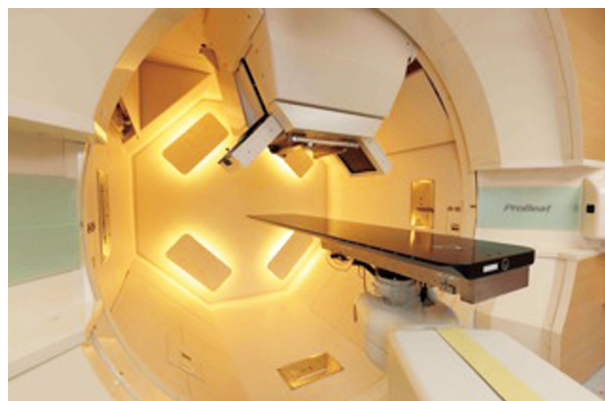
陽子線治療は水素の原子核である陽子を加速し病変に照射し治療を行う。X線治療と比較して正常組織に与える副作用を少なくでき、いわゆるピンポイント治療を得意とする。従来は照射する範囲を病変の形状に合わせるために金属遮蔽物や樹脂製構造体を陽子線ビーム中に介在させる必要があった。精緻な照射野形成は難しく、本来不要な中性子の発生などが解決すべき課題とされていた。これらの問題を解決できる新たな方法としてスポットスキャンニング照射技術がある。これは細いビームの照射位置を高速に制御して病変の形に合わせて照射する技術で、2006年より米国MDアンダーソン癌センターで日立製作所が実現し臨床応用が開始された。これを小型化した改良型装置が北海道大学病院に設置され、2014年2月25日に薬事承認を得て、3月19日から臨床使用が開始されていた。しかし、呼吸等により位置が変動する病変に対しては正確な陽子線投与が困難なため、依然として治療可能な部位は動きの無い場所に限られていた。

北海道大学は1999年に動体追跡照射技術を白土教授

の下で開発し世界で初めて臨床応用に成功した。この技術は腫瘍近傍に留置した1.5-2.0mm径の純金製マーカーを2方向X線透視装置によって位置をリアルタイムで捕捉し続け、腫瘍が動き続けていても、予め計画した位置に腫瘍が存在している瞬間にのみ治療X線を照射することを可能とする技術である。

本学が国際特許を有する本技術をスポットスキャンニング照射技術と融合することにより、今まで不可能であった肺や肝臓など呼吸等で位置が変動する体幹部の腫瘍であっても高精度な陽子線照射が可能となる。さらに、正常組織への照射を大幅に減らすことができ副作用の少ない治療が可能となる。薬事承認を受け2014年12月より世界初の動体追跡照射技術を用いた陽子線スポットスキャンニング治療の臨床応用を開始した。今までの照射技術では治療困難であった方々、より副作用の少ない治療を望まれる方々に対して最先端の治療が受けられるようになることが期待される。

(研究発表プレスリリース掲載日 2014.10.23)



●受賞関係

医学研究科・医学部医学科から受賞されました。
平成26年11月から12月までを掲載します。

1. 2014/11/20

石川 麻倫 (腫瘍病理学分野 博士課程2年)
日本病理学会秋期特別総会優秀演題賞受賞

2. 2014/11/09

山仲 勇二郎 (細胞生理学分野 助教)
日本時間生物学会学術奨励賞受賞
研究題目：時間隔離実験室を利用したヒト生物時計の非光同調機構の解明

3. 2014/11/01

須藤 英毅 (脊椎・脊髄先端医学講座 特任准教授)
平成26年度日本医師会医学研究奨励賞受賞
研究題目：思春期特発性側弯症に対する次世代型3次元変形矯正固定術：アナトミカル・ロッドを用いたオーダーメイド外科治療への展開

第18回（平成26年度）医局対抗サッカー大会

本年度の医局対抗サッカー大会は11月9日、16日、23日に予選リーグを、11月30日に決勝トーナメントを、札幌市西区の農試公園屋内競技場（ツインキャップ）を舞台に行われました。今年度は内科Ⅰ、内科Ⅱ（FC Atsumi）、循環器内科、消化器外科Ⅰ、消化器外科Ⅱ、整形外科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、精神神経科、リハビリテーション科、病理生理基礎合同チームの13チームが参加し大会を盛り上げてくれました。

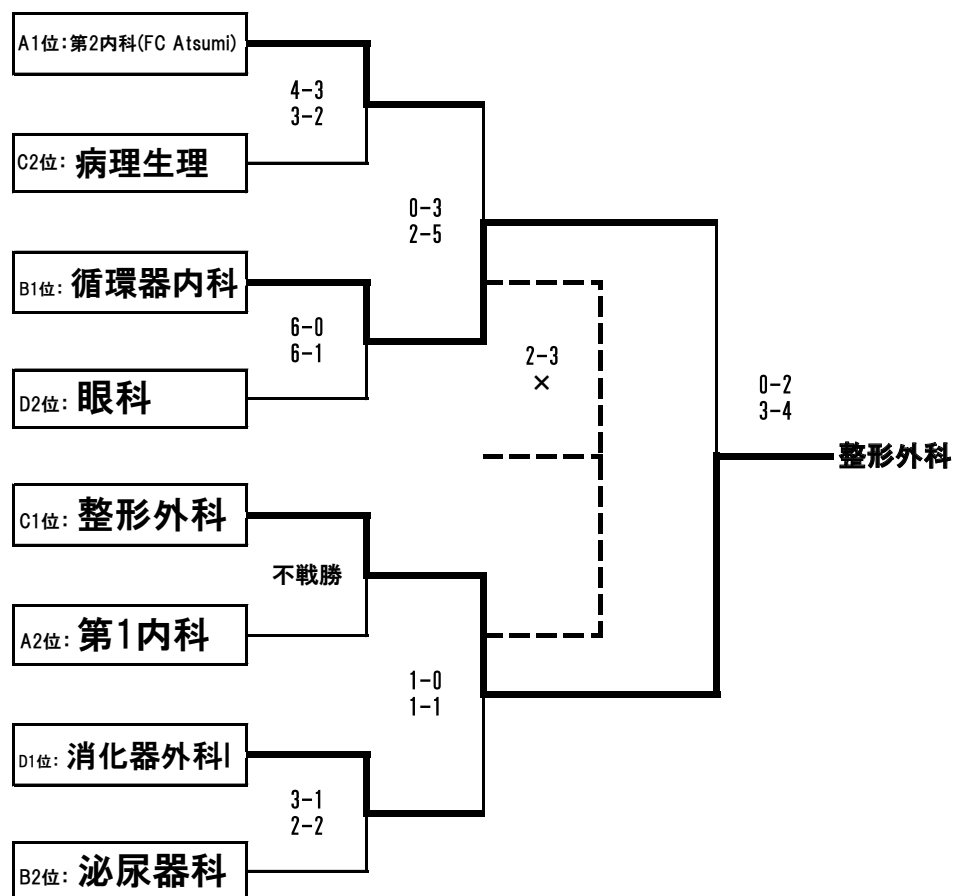
予選Aブロックは2勝の内科Ⅱ（FC Atsumi）が1位、2位は耳鼻咽喉科に競り勝った内科Ⅰが決勝トーナメントへ進出、耳鼻咽喉科が3位でした。Bブロックでは、循環器内科が圧倒的な強さで3勝をあげ1位となりましたが、2位は精神神経科と泌尿器科がしのぎを削り合い、ともに1勝1敗1分で勝ち点4、直接対決の結果が1-1の引き分け、得失点差も2点とほぼ同じ数値が並びましたが、総得点がわずかに2点ほど上回った泌尿器科が決勝トーナメントへと駒を進めることとなり、3位が精神神経科、4位が消化器外科Ⅱでした。Cブロックは、毎年優勝候補である整形外科が余裕で1位通過し、教授陣が活躍した病理生理基礎合同チームが2位で決勝トーナメントへと進み、3位が皮膚科でした。Dブロックは、サッカー経験者が多かった消化器外科Ⅰが1位、リハビリテーション科に競り勝った眼科が2位で決勝トーナメントへ進み、リハビリテーション科が3位でした。

決勝トーナメントの1回戦は、第一試合が内科Ⅱ（FC Atsumi）vs病理生理基礎合同チーム、第二試合が循環器内科vs眼科、第三試合が整形外科vs内科Ⅰ（当日人数が揃わず残念ながら棄権）、第四試合が消化器外科Ⅰvs泌尿器科、の組み合わせで行われました。第一試合は、病理生理基礎合同チームの教授陣が活躍され点を取られては取り返しの接戦となったのですが、選手層の厚い内科Ⅱ（FC Atsumi）が最後に競り勝ち準決勝へ進出しました。第二試合は破壊力のある攻撃陣を有する循環器内科が圧倒的な力を見せつけ眼科を退け、内科Ⅱ（FC Atsumi）との準決勝へと進みました。第三試合は内科Ⅰが開始時間となってもメンバーが揃わなかったため棄権となり整形外科が不戦勝で準決勝へと駒を進めることとなりました。第四試合は前

半3-1でリードしていたため次の試合を見据えて主力を温存する方針とした消化器外科Ⅰが泌尿器科に押し込まれ一時1点差まで追いつかれるという場面もありましたが、なんとか5-3で逃げ切り消化器外科Ⅰが準決勝へと勝ち進むこととなりました。準決勝の第一試合は平均的に技術レベルの高い選手層を持つ内科Ⅱ（FC Atsumi）と爆発的な攻撃力をもつ循環器内科との対決となりましたが、その攻撃力を抑えることができず循環器内科が勝利し初めて決勝へと駒を進めることとなりました。もう一方の準決勝は昨年度の決勝と同じカードとなり、お互いに負けたくない気持ちが前面に出た緊迫した試合となりました。前半は1-0で整形外科がリードするも後半に消化器外科Ⅰが1点を取り返し追いつくという白熱した接戦となりましたが、最後に整形外科のエースが気迫あふれるプレーを見せ消化器外科Ⅰの守りを破り2-1で勝利へと導き、整形外科が決勝へと進みました。今年度の3位決定戦は怪我予防の意味で前半20分だけ行うこととなり、3-2で消化器外科Ⅰがなんとか内科Ⅱ（FC Atsumi）の追い上げを退け3位となりました。決勝は例年のごとく熱い試合が繰り広げられました。前半は整形外科の厚い壁が循環器内科の力強い攻撃を跳ね返し、整形外科が2-0とリードしていましたが、後半には循環器内科が整形外科の厚い壁をこじ開け連続で3点を取り返しもう一步のところまで行く場面がありました。しかし、取られたら取りかえす力を持つ整形外科が最終的には循環器内科を6-3で下し、5回目の優勝を果たすこととなりました。

予選・決勝トーナメントを通じ、大きなけが人を出さずに大会を終えることができたのは何よりでした。しかし、なかなかスケジュールが合わず出場を辞退するチームがあったことは残念でした。来年度は一つでも多くのチームに参加して頂き、皆さんと大会を盛り上げていきたいなと思っております。最後になりましたが、運営や審判業務を手伝ってくれた、北大医学部サッカー部員の皆さんに感謝し、この場を借りてお礼申し上げます。

幹事 消化器外科Ⅰ
(文責 消化器外科Ⅰ 相山 健)



決勝トーナメント表



整形外科のエース



優勝した整形外科

3 お知らせ

退職記念式典のお知らせ

平成27年3月退職の教授の退職記念式典を次のとおり開催します。

退職教授：藤田 博美 教授

(衛生学・細胞予防医学分野)

日 時：3月19日(木) 16:00～

場 所：医学部学友会館「フラテ」ホール

新任教授特別セミナーについて

医学研究科では、平成24年度より、新任の教授が現状と抱負および研究内容等を講演するセミナーを開催しています。

第17回 山下健一郎 特任教授(移植外科学講座)

肝移植後の免疫抑制療法—免疫抑制から免疫寛容へ—

平成26年11月27日(木)開催



山下特任教授

第18回 篠原 信雄 教授(腎泌尿器外科学分野)

有転移腎癌に対する治療からみた血管新生阻害療法の光と影

平成27年1月22日(木)開催



篠原教授

なお、次回以降の予定は以下のとおりとなっております。

- ・2月19日(木) 齊藤 卓弥 特任教授(児童思春期精神医学講座)
- ・3月26日(木) 西原 広史 特任教授(探索病理学講座)

消防訓練の実施

医学研究科・医学部、遺伝子病制御研究所、アイソトープ総合センター合同で10月7日(火)14時25分、医学研究科 附属動物実験施設1階 検査室から出火したとの想定で、消防訓練を実施しました。

出火時の初動体制を確立するために、各行動の中心となる自衛消防班が直ちに活動し、出火場所に対応して各職務分担の任務(通報連絡・避難誘導・消火・防護措置等)を行い、被害を最小限に食い止める訓練を実施しました。

る訓練を実施しました。

終りには笠原研究科長から日頃の防火に対する心構えについて話があり、参加した約120名の教職員・学生は訓練の重要性と防災意識を改めて見直しました。

総合訓練に続いて、消火器を使った消火訓練を防災設備業者指導のもと実施し使用方法について理解を深め、一連の消防訓練を無事に終える事ができました。

平成27年度 医学研究科（博士後期・修士後期）学生募集出願状況

平成27年度医学研究科博士課程後期募集及び修士課程後期募集の結果、出願者数は次の通りでした。

- ・博士後期募集 60名（男52名、女8名）
- ・修士後期募集 7名（男3名、女4名）

平成27年度 科学研究費補助金応募状況

研究種目	新規申請	継続申請
	件 数	件 数
特別推進研究	0	0
新学術領域研究（研究領域提案型・計画研究）	3	2
新学術領域研究（研究領域提案型・公募研究）	25	3
基盤研究（S）	2	1
基盤研究（A）（一般）	5	2
基盤研究（A）（海外学術調査）	0	0
基盤研究（B）（一般）	39	10
基盤研究（B）（海外学術調査）	1	0
基盤研究（B）（特設分野研究）	1	0
基盤研究（C）	38	50
基盤研究（C）（特設分野研究）	0	0
挑戦的萌芽研究	55	15
若手研究（S） ※1		0
若手研究（A）	4	1
若手研究（B）	15	20
研究活動スタート支援 ※2		0
合 計	188	104

※1 平成22年度より新規申請の受付を停止

※2 新規申請の受付開始は、平成27年3月予定
（参考：平成26年度新規申請 7件）

平成26年度 財団等の研究助成採択状況

財団法人等名	種 別	研究者名	交付金
公益財団法人 石本記念デサントスポーツ科学振興財団	第36回 学術研究	山仲 勇二郎	500,000
公益財団法人 旭硝子財団	自然科学系研究奨励	阿部 理一郎	2,000,000
公益財団法人 喫煙科学研究財団	研究助成（初年度）	三輪 聡一	2,000,000
		田中 真樹	2,000,000
		吉岡 充弘	2,000,000
		玉木 長良	2,000,000
公益信託 成茂神経科学研究助成基金 （受託者 三菱UFJ信託銀行株式会社）	研究助成金	大村 優	200,000
		榎木 亮介	300,000
		小野 大輔	300,000
公益財団法人 高齢者眼疾患研究財団	研究助成金	石田 晋	1,000,000
公益財団法人 第一三共生命科学研究振興財団	海外共同研究支援助成	南保 明日香	500,000
公益財団法人 秋山記念生命科学振興財団	研究助成（一般）	南保 明日香	1,000,000
		岩崎 倫政	1,000,000
	研究助成（奨励）	小林 純子	500,000

公益財団法人 伊藤医薬学術交流財団	第20回海外学会等出席	松島 理明	300,000
		川久保 和道	200,000
		趙 文静	250,000
		木下 哲志	250,000
	第20回海外留学研究交流助成	笠松 純	300,000
		山崎 康博	300,000
第20回学会等助成	本間 さと	400,000	
公益財団法人 杉野目記念会	海外学識者講演会開催	本間 さと	50,000
公益財団法人 北海道大学クラーク 記念財団	博士後期課程在学研究助成	伊東 孝政	500,000
		清水 智弘	500,000
		陳 冲	500,000
公益財団法人 小笠原科学技術振興財団	国際研究集会出張助成	山野辺 貴信	250,000
ネスレ栄養科学会議	研究助成	鶴川 重和	1,000,000
サノフィ・ジャパングループ GDC 推進室	教育・研究助成	篠原 信雄	500,000
		佐々木 秀直	800,000
		豊嶋 崇徳	200,000
資生堂	第7回 女性研究者サイエンスグラント	南保 明日香	1,000,000
アクテリオンファーマシューティカルズジャパン株式会社	第9回 アクテリオン アカデミア プライズ	原田 拓弥	2,000,000
公益財団法人 武田科学振興財団	医学研究奨励	大村 優	2,000,000
ブリストルマイヤーズ株式会社	第1回（2015年） 関節リウマチ臨床研究助成	保田 晋助	4,000,000
	悪性腫瘍領域支援	近藤 健	900,000
日本イーライリリー株式会社	研究助成	平野 聡	1,000,000
		大泉 聡史	500,000
ファイザー株式会社	アカデミック・コントリビューション	石田 晋	3,000,000
		豊嶋 崇徳	1,500,000
		丸藤 哲	1,000,000
公益財団法人 持田記念医学薬学振興財団	第32回 研究助成	大場 雄介	3,000,000
	第31回 留学補助	笠松 純	500,000
公益財団法人 内藤記念科学振興財団	第9回（2014年度） 内藤記念女性研究者研究助成金	山崎 美和子	2,000,000
	第43回（2014年度） 内藤記念特定研究助成金	藤岡 容一郎	500,000
	公益財団法人 国際耳鼻咽喉科学振興会	杉田 SPIO 研究助成金	福田 諭
中外製薬株式会社	学術助成	秋田 弘俊	500,000
		豊嶋 崇徳	3,000,000
		櫻木 範明	1,000,000
		實金 清博	500,000
		高畑 雅彦	2,000,000
		渥美 達也	2,000,000
		小野寺 康仁	2,000,000
グラクソ・スミスクライン株式会社	2014年 GSK 研究助成	藤岡 容一郎	2,000,000
公益財団法人 住友財団	2014年度 基礎科学研究助成	南保 明日香	2,500,000
特定非営利活動法人 日本心臓リハビリテーション学会	若手研究者奨励助成	高田 真吾	250,000
MSD株式会社	2014年研究助成	岩崎 倫政	500,000
		高畑 雅彦	500,000
		筒井 裕之	500,000
		絹川 真太郎	500,000
		清水 宏	500,000
		柿坂 達彦	500,000
		井上 猛	500,000
		保田 晋助	500,000
公益財団法人 安田記念医学財団	平成26年度 若手癌研究助成	豊嶋 崇徳	500,000
公益財団法人 かなえ医薬振興財団	平成26年度 研究助成	高橋 秀尚	1,000,000
サノフィ・ジャパングループ GDC 推進室	教育・研究助成	小野澤 真弘	1,000,000
公益信託 日本白血病研究基金	第24回 平成26年度 研究助成	阿部 理一郎	800,000
公益財団法人 寿原記念財団	第29回（平成26年度）研究助成	南保 明日香	500,000
やずや食と健康研究所	2014年やずや食と健康助成研究 【チャレンジ部門】	絹川 真太郎	1,200,000
		小林 道	400,000

平成26年11月14日までの採択判明分

平成26年度末 教務関係行事予定表

(医学研究科・医学部医学科)

月	日	曜	行 事 等
2	2	月	第109回医師国家試験受験票及び医師免許申請書交付【～5日（木）】
	3	火	全学教育授業終了
	5	木	教授会（学部卒業者の決定、修士第二次、博士課程後期入学試験合格者決定、語学試験合格者決定） 教授会終了後、奨学基金委員会 修士課程（3月修了予定）学位論文審査結果報告締切 博士課程（3月修了予定）学位論文審査結果報告締切
	6	金	博士課程〔新カリキュラム〕学位審査中間審査学生キーワード調書締切 2年次医学専門科目授業終了
	7	土	第109回医師国家試験【～9日（月）】
	9	月	全学教育科目成績入力締切
	10	火	（博士課程二次出願資格審査申請受理期間【～12日（木）】）
	12	木	研究科教務委員会（修士修了認定、総代決定）
	13	金	研究生願書受理期間※国内から出願【～20日（金）】
	14	土	4年次「共用試験OSCE」
	16	月	4年次授業終了・追再試験【～23日（月）及び空きコマ】 成績確認期間・成績評価申立て期間（全学教育）【～2月17日（火）】
	17	火	（博士課程二次願書受理期間【～20日（金）】）
	19	木	拡大研究科教授会（修士・博士課程（3月修了予定）学位論文最終審査、修了認定） 教授会 平成27年度私費外国人留学生（学部）入試第2次選考試験（小論文・面接）実施 全科臨床実習オリエンテーション【17:00～学友会館「フラテ」ホール】及び4年次学友会懇話会【17:30～学友会館「フラテ」1階大研修室】 学部2・3・4年次（第1回目）成績入力締切
	20	金	3年次授業終了
	23	月	学部2・3・4年次（最終）成績入力締切
	25	水	平成27年度本学第2次入学試験（前期日程一日目）実施 第5試験場（高等教育推進機構E棟）副担当《主担当：獣医学部》
	26	木	平成27年度本学第2次入学試験（前期日程二日目）実施 第5試験場（高等教育推進機構E棟）担当【医学部医学科】 成績確認期間（学部（2・3・4年次））【～3月4日（水）】
	27	金	全学教育科目成績確定 以降：総合教育部：学部・学科移行手続き（第2回志望調査～振り分け）
3	2	月	修士、博士前期・後期入学手続期間【～6日（金）】 学士編入学者（2年次）入学手続期間【～5日（木）】
	3	火	（博士課程二次入学試験）
	4	水	高桑榮松奨学基金授与式 11:30～
	6	金	大学院2学期・通年開講授業科目成績締切
	9	月	博士課程公開発表会〔新カリキュラム〕（3月修了予定）公開発表会【～13日（金）】
	12	木	平成27年度本学第2次入学試験（後期日程）実施 第9試験場（高等教育推進機構E棟B）担当【医学部《保健学科3専攻》】 医学科教務委員会（3・4年次・旧カリ2年次・旧カリ3年次進級判定、新5年次全科臨床実習履修許可判定、新6年次選択実習配属先決定）
	16	月	4月入学研究生入学手続期間【～19日（木）】
	18	水	第109回医師国家試験合格者発表（14:00北海道厚生局）
	19	木	教授会（3・4年次・旧カリ2年次・旧カリ3年次進級判定進級判定、新5年次全科臨床実習履修許可判定、新6年次選択実習配属先決定、博士課程二次入学試験合格者決定） 教授会終了後、退職記念式典《学友会館「フラテ」ホール》 修士・博士課程（6月修了予定）論文提出期限
	20	金	5年次授業終了 （博士課程二次入学手続期間【～24日（火）】）
	25	水	10:00～学位記授与式（博士・修士・学士）、13:30～学士学位記伝達式（学友会館「フラテ」ホール） 概ね15:00<学士学位記伝達式終了後>～修士・博士学位記伝達式（臨床大講堂） 18:30～卒業祝賀会（札幌グランドホテル）



(撮影：安藤 優記)

広報室便り 32

2015年の広報室は、医学研究科・医学部医学科の日本語ウェブサイトの全面改訂作業から始まりました。昨年、英語サイトを作成・オープンしましたが、日本語サイトは情報量が格段に多く、広報室員全員で一生懸命完成・オープンに向けて作業を進めていますので、もう少々おまちください。年度内にオープンする予定です。

最近、組織の各種取り組みを広く社会に理解してもらうアウトリーチ活動を積極的に行うことへの要請が高まってきています。この後は、また来年度に向けた各種広報媒体の制作準備を行っていくこととなりますが、より分かりやすい広報ツールの制作に努めていきたいと考えています。

(広報室員 和田 雅子)

編集後記

2015年の年頭を飾る本号は笠原医学研究科長の年始のご挨拶から始まります。北大医学研究科の展望が記され、本研究科が新たなステージを迎えている事が実感できる内容です。大学院教室紹介は「神経内科学分野」です。佐々木教授、廣谷医局長より最近の活動内容、今後の目標を紹介していただきました。診療、教育、研究への積極的な取り組みが伺えます。MD-PhDコースの紹介では、実際に在籍している鈴木智貴さんより率直な気持ちも含めて記していただきました。学生さんにぜひ読んでいただきたい記事です。さらに行事報告、プレスリリース等、ホットなトピックスが続きます。また医局対抗サッカー大会の報告は試合の経過、熱戦の様子がよくわかります。

本号は年頭にふさわしい活気あふれる内容となりました。原稿をお寄せいただきました皆様に感謝申し上げます。

(広報編集委員 石田 晋)

—— Home Pageのご案内 ——

医学研究科／医学部医学科広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

goiken@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部医学科

発行 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科
広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉（委員長）、石田 晋、
大場 雄介、佐藤 松治